



法学部の“Classic”は歴史と伝統はここにあります。
しかし、同時に、法学部は“innovative”です。法学部は昨年、創立140周年を迎えました。組織が140年の間に生起する数々の社会変化を乗り越えて、存在し続けるためには、不断の革新が必



デ・ラ・サール大学での法学研修 修了証授与後の記念写真

須であることは言うまでもありません。法学部もその努力をしてきました。
明治法律学校当時は現在の司法試験に相当する試験で全合格者の4割を占めるなど、法曹の輩出に特に力を注いでいたようです。私が学生だった半世紀前も司法試験合格者数で法学部の評価がなされるような社会風潮の中で合格者数を競っていました。そして、現在ももちろん法学部としてさまざまな司法試験対策をしています。しかし、今や、その主眼は他大学との競争などではなく、一人ひとりの学生のそれぞれのキャリアプランを実現できるよう支援する取り組みの一環として、法曹志望者にはそのための支援をするということにあります。現在の法学部の学生のうち、法曹志望者は1割弱と思われる。多くの学生は、国内外のさまざまな企業・組織や官公庁・公共団体への就職等を志望しているのです。そういう学生の



ハワイ大学での法学研修 ハワイ州議会議事堂

明治大学オフィシャルサイト内
「法学部」

<https://www.meiji.ac.jp/hogaku/index.html>



ためのカリキュラムや支援策も充実させています。卒業後の進路を想定したコース制を採用し、法曹コース以外に、ビジネスローコース、国際関係法コース、公共法務コース、法と情報コースを設置したことや、海外の複数大学において法学研修を実施していることなどはその一例です。また、カリキュラムも社会の変化や学生のニーズに合わせて機動的に見直し

ており、直近でも今年度の新入生から改正をしました（詳細はP26）。記念館からリバティタワーに変わったように、法学部も大きな革新や小さな革新を止まることなく繰り返しているのです。その成果の一端は、この特集の「卒業生の活躍」にも表れています。
“Classic yet Innovative”の法学部をこれからもぜひ注目してください。



法学部の“歴史と伝統、そして革新”

法学部長

上野 正雄 UENO Masao

法学部教授

専門：犯罪学、犯罪者処遇法、少年法



記念館とリバティタワーの写真の間に“Classic yet Innovative”というロゴの入ったポスター、これが私の個人研究室に10年近く貼ってあります。研究室で一息吐く度に、これを眺めてはいろいろ思う、私にとってそういうものです。
私は1976年に明治大学法学部に入学しました。それから現在までおよそ半世紀が経過し、今年には裁判所から明治大学法学部に転職して20年目になります。記念館のある明治大学に入学し、リバティタワーのある明治大学に転職したので。そのせいか、記念館とリバティタワーは、私にとって、私と明治大学をつなぐ象徴的な紐帯のように感じられ、このポスターは見る度にその思いを喚起させてくれるのです。
大学などない地方の小さな町から上京してきた私にとって、高校とは比較にならない和泉キャンパスの広さと建物の多さ、そして学

生の多さは驚くばかりでしたが、不思議と居心地の良さを感じていました。全国各地から集まってきた学生たちと付き合い、先生から読書会に誘ってもらい、ちょっとした質問をきっかけに学部事務室の職員に親しくしてもらったことなど、その理由はいろいろありますが、とにかく、居心地の良い大学に入り浸るという状態でした。駿河台キャンパスでは、記念館の4階にあった法学部の法制研究所

で司法試験の受験勉強をしていましたが、勉強の中心は合格した先輩による指導と受験生仲間の勉強会で、やはり居心地良く日々長居していました。学生数の多い大学、学部でありながら濃密な人間関係が形成されるような仕組みと文化が法学部にあったのだと思います。そして、これは転職後に関わってきた学生たちを見るに、形は変えながらも今なお引き継がれているように思います。私の実感する



“Classic yet Innovative”ポスター